

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 2946
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
TEL 0463-59-4111 (内線 2200)

欧州金融危機と軍事産業の再編成

吉留公太

欧州経済を揺るがしている金融危機は、まだその出口が見えていない。危機に見舞われた各国は緊縮財政を採用せざるを得なくなり、財政支出に大きく依存しているヨーロッパの防衛産業も岐路に立たされている。

EU 加盟国内でも特に国防支出の大きいフランスとイギリスは (2010 年の国防支出はそれぞれ、約 610 億ドルと 580 億ドル)、財政再建のためにその削減を迫られている。こうして皮肉にも、軍事的脅威や国際安全保障環境の変化といった要因によってではなく、金融危機に伴う緊縮財政が EU 加盟国間の防衛協力を加速させている。

その一事例は、2010 年 11 月 2 日の英仏首脳会談で発表された、核兵器開発能力の共有、統合遠征軍の創設、空母共同運用の合意である。簡単に言ってしまうと、英国は空母を作ったが、艦載機を用意する予算が枯渇した。フランスは航空機を多く持っているが、これ以上空母を製造する予算がない。そのため両国で空母の共同運用を構想することになったわけだ。一昔前には考えられなかった動きであろう。

これまで EU は、共通安全保障防衛政策 (CSDP) の推進を掲げてきた。アムステルダム条約 (1997 年 10 月調印、1999 年 5 月発効) で域外平和維持活動を担うことを決め、1998 年 12 月の英仏合意 (通称「サンマロ合意」) で、EU が自立的な防衛能力を整備することで合意し、さらに、「ヘルシンキ目標」 (1999 年 12 月) で防衛力整備計画を立ててきた。しかし、コソヴォ紛争 (1999 年) やアフガニスタン戦争 (2001 年～) で明らかになったことは、アメリカに比べて EU の防衛能力が見劣りしていることであった。EU の抱えている課題は、数万人規模の兵

員の手当でもさることながら、防衛産業分野でのアメリカからの相対的自立であり、各国別の規格で装備を供給してきた防衛産業の整理統合であった。

このため、既に 1990 年代後半から、欧州防衛産業の再編が展開されてきた。当初、英国に本社を置くブリティッシュ・エアロスペース (BAE) とドイツに本社を置くダイムラー・クライスラー・エアロスペース (DASA) との合併交渉が報じられた。しかし、それは失敗して、エアロスパシアル (仏)、DASA (独)、CASA (スペイン) の三社が合併し、2000 年 7 月、民間航空機部門のエアバスを傘下に収める EADS を設立させた。こうして BAE と EADS の二大企業が欧州の航空・防衛産業を代表することになった。

しかし、この二大企業も欧州金融危機の影響を免れることは出来ず、両社の合併交渉が行われていた。ところが、BAE の「黄金株」を所有する英政府と EADS の有力株主である独仏政府との利害調整は難航し、2012 年 10 月 10 日、合併交渉は白紙に戻ったと発表された。今後、この動きがどうなるかは未知数である。何れにせよ、欧州各国の財政状況が急速に回復する期待が持てない以上、欧州の防衛産業は大幅な業務縮小か、あるいは、新規需要の開拓を迫られる。しかし、前者は大規模な失業者を生むから、各国政府には難しい決断になる。

不幸にも、東アジア、南アジア、中東各国は飛躍的に軍事費を伸ばしており、欧州の防衛産業は虎視眈々と商機をうかがっている。特に、EU は 1989 年の天安門事件以来、対中武器輸出を禁止しており、以前から禁輸解除を求める声があがっている。中国の防衛能力拡大は日本にとっては他人事ではない。今後の欧州防衛産業の行方には注目しておくべきであろう。

(所員/よしとめ・こうた)

「地域経営」関連文献—保存版

国際経営研究所では、ここ数年間、地域経営をテーマにしたシンポジウムを開催してきました。「だより」本号では一区切りという意味を兼ねて、文献リストを作成しました。ご活用ください。

- ・メドウズ、D.、他著『地球のなおし方—限界を超えた環境を危機から引き戻す知恵』ダイヤモンド社、2008年。
- ・石原武政、西村幸夫編『まちづくりを学ぶ』有斐閣、2010年。
- ・市田行信、他著「地域社会ぐるみでの高齢者の健康づくり」『季刊政策・経営研究』2008年2号。
- ・井上繁著『日本まちづくり事典』丸善、2010年。
- ・奥野信宏著『地域は「自立」できるか』岩波書店、2008年。
- ・関東経済産業局編『活かそう!地域資源 つなごう!農商工連携』関東経済産業局、2000年6月。
- ・京都大学地域研究統合情報センター編『地域から読む現代—グローバル化のなかの人々と社会』晃洋書房、2012年。
- ・清成忠男著『地域創生への挑戦』有斐閣、2010年。
- ・国際経営研究所編「地域の時代とビジネス革新」『国際経営フォーラム』神奈川大学 国際経営研究所、2004年6月。
- ・小長谷一之、他著『地域活性化戦略』晃洋書房、2012年。
- ・近江環人地域再生学座編『地域再生—滋賀の挑戦』新評社、2011年。
- ・近藤加代子、谷正和編『循環から地域を見る—自然循環型地域社会のデザインに向けて』海鳥社、2010年。
- ・関満博編『新「地域」ブランド戦略』日本経済新聞出版社、2007年。
- ・鈴木純一「農村力 輝く山里に住んでみる」日本経済新聞、2012年9月29日号。
- ・SOTOKOTO「地域を守る、みんなの株式会社」『SOTOKOTO』2011年6月。
- ・田中道雄、他編『地域ブランド論』同友館、2012年。
- ・地域振興総合研究所編『渾身ニッポンローカルパワー 地域力 (ちいきちから)』講談社、2010年。
- ・都築光一編著『地域福祉の理論と実際』建帛社、2012年。
- ・同友館編『企業診断』同友館、2012年7月号。
- ・(財)中小企業総合研究機構編『地域経営—まちづくり』同友館、2002年。
- ・中小企業庁経営支援課監修『中小企業地域資源活用促進法活用の手引き—連携組織による地域の活力づくり』第一法規、2007年。
- ・中田実、他著『地域再生と町内会・自治会』自治体研究社、2012年。
- ・日経MJ「街づくり会社元気に稼ぐ」日経流通新聞、2012年3月19日。
- ・日本政策投資銀行地域企画チーム編著『実践!地域再生の経営戦略—全国36のケースに学ぶ“地域経営”』金融財政事情研究会、2010年。
- ・博報堂地ブランドプロジェクト編著『日本を救う地域ブランド論—地ブランド』弘文堂、2006年。
- ・久繁哲之助『地域再生の罫—なぜ市民と地方は豊かになれないのか?』筑摩書房、2010年。
- ・平野繁臣著『地域経営学のススメ—内発型循環型社会の構造と機能』通商産業調査会、2000年。
- ・古川一郎編『地域活性化のマーケティング』有斐閣、2012年。
- ・真坂昭夫、他著『宝探しから 持続可能な地域づくりへ』学芸出版社、2010年。
- ・丸田一著『地域社会形成の思想と論理』ミネルヴァ書房、2004年。
- ・山崎正和編著『文化が地域をつくる』学陽書房、1993年。

翻訳家としての村上春樹

関 真 彦

レイモンド・カーヴァーは1980年代アメリカ文学界で活躍した短編の名手であるが、村上春樹は彼の翻訳家としても有名である。カーヴァーの小説は、物理的、精神的困窮にあえぐ貧乏白人の生活を鮮やかに切り取って提示するものが多く、文章は主人公たちの精神状態をあらわすかのように切り詰められ、リアリズムに則りつつも、そこに一瞬差し込んでくる現実の不条理さをうまくすくいとっている。

村上と当代随一の翻訳家である柴田元幸は、『翻訳夜話』においてカーヴァーの短編"Collectors"をそれぞれ翻訳している。別に勝敗をつけるべき性質のものでもなからうが、おそらく原文でこの短編を読んだ者のほとんどが柴田訳に軍配を上げるのではなからうか。村上訳は、あまりに村上ブランドになりすぎていて、もうひとつの村上小説のように見えかねないのである。しかし、私は別にここで村上春樹の翻訳家としての腕に疑問を呈したいわけではない。私に関心があるのは、村上春樹が（おそらく意識はしていないだろうが）どのようにしてカーヴァーの短編を自分の世界に引き込んでいるかであり、そしてそこに、彼の世界の形作り方の一端が見えると思うのだ。

たとえば、村上訳は「僕は失業していた。」という一文から始まる。そして主人公は路上を見てこう思う。「路上には誰もいなかった、まったく。」(117) 対して、柴田訳では「私は失業していた。」「通りには誰もいなかった。何もない。」(133) となる。この小説は、無職の主人公が、突然訪ねてきた掃除機のセールスマンらしき男に、部屋の埃ごと自らのアイデンティティーまで奪われてしまうというものなのだが、そういう陰惨な小説にあまり「僕」は似つかわしくない。村上訳は引用を見ても分かる通り、リズムが良く、ある程度年を食った男が何もかも奪われてしまうという感じの柴田訳に比べて、まだ

若い男が闖入者に何もできずに戸惑うといった感が強くなる。そして原文で読んだ者の感想はおそらく柴田訳に沿ったものが圧倒的であろうと思う。

そして最後、掃除機はいらないかと言う男に主人公はこう言う。「いや、いらぬな、と僕は言った。僕はすぐにここを出て行くつもりでね。あつても邪魔になるだけだから。」(村上訳 131) 「いいえ、と私は言った。やめときます。どのみちじきにここを出ていくんです。荷物になるだけだから。」(柴田訳 146) ここでも村上訳はリズムが良く、主人公にまだ何かをしようとする意思が残っていることを強く示唆する。対して柴田訳は現実の凶暴さに打ちひしがれた男の言葉である。

終始この調子なのだが、この村上が柴田訳にプラスして持ち込んだものが、彼が現代の読者を魅了している要素がある程度説明しうるであろうと思う。

村上訳は柴田訳に比べて心地よいリズムを刻む。まだそこまで状況は悪くなってないぞ、そんな感覚を抱かせる。そして主人公はどんな逆境にあつても、それなりの意志の強さをしっかりと保持している。現実の不条理に身も心もやられてぐったりしている男ではなく、それをある程度客観的に見るスタンスを保って、自分ではなんとかするという夢は捨てない男 — 対象と自分を離そうとするから、その距離が優しさにも見えるような、そんな「僕」を村上は提示する。この「僕」を中心とした世界を作り上げる力こそ、村上の傑出した才能であり、彼を彩る「色」を支えるものなのであると私は思う。

参考文献

村上春樹・柴田元幸(2000)『翻訳夜話』東京: 文藝春秋 (文春新書)

(所員/せき・まさひこ)

研究余滴

国際経営研究所の主な活動状況一報告

- ・ 共同研究プロジェクト支援
- ・ 共同研究プロジェクト報告ブックレット発行
- ・ 「マネジメントジャーナル」の発行：現在進行中
- ・ 「国際経営フォーラム」の発行：現在進行中
- ・ 「国経研だより」発行：年4回
- ・ 地域コンシェルジュ構想基本データ開示
- ・ 平塚商工会議所 中小企業相談所 共催 シンポジウム開催
- ・ 小学校・中学校、高等学校対象「わたしたちの提案」募集

神奈川大学国際経営研究所主催 シンポジウム
統一論題：地域経営の推進力（エンジン）
を目指して—市民一人ひとりの役割—

日時：2012年11月10日（土）10:00～17:00
場所：平塚商工会議所 3階大ホール

第Ⅰ部
研究者、経営者からの問題提起(10:00～12:00)
基調講演：香川大学大学院 地域マネジメント
研究科 研究科長 板倉 宏昭
特別講演：NPO 法人尾道空き家再生プロジェクト
代表理事 豊田 雅子
特別講演：平塚商工会議所会頭 福澤 正人

第Ⅱ部
「わたしたちの提案」発表、表彰、講評
(13:00～14:50)
児童、生徒8名による報告と表彰、講評

第Ⅲ部
パネルディスカッション(15:00～17:00)
パネリスト：講演者3名に、地元経営者 小川 敦
を加え、計4名
モデレータ：地元経営者 石塚 裕
主催者総括：国際経営研究所所長 海老澤 栄一
主催者挨拶：サロン de WINE 田城 裕司

「わたしたちの提案」入賞者決まる

今年3回目を迎えた小学校、中学校、高等学校対象の提案作文の入賞者が、下記のとおり決定した。研究所の研究テーマの1つである“地域経営”を児童、生徒の視点から語ってもらう企画である。経営者としての視点から観た、夢のあるしかも鋭い提案が寄せられた。入賞者は、11月10日に開催される研究所主催のシンポジウムで発表の機会を得る。

今年の特徴は、東京都、横浜市、秦野市、平塚市と多様な地域からの参加があったことと、話題性のあるテーマと独創的なテーマとの共在に会えたこと、の2つである。

[小学生部門]
最優秀賞
ハイパーたけのこまつりと学校アパート
稲城市立平尾小学校 中出 一光
中出 あかり

優秀賞
土、日ハッピーデイ
横浜市立日吉台小学校 駒形 心

奨励賞
家族のように誰もが集まれるフリースペース
秦野市立末広小学校 廣瀬 史帆

[中学生部門]
最優秀賞
ゴミが落ちていないきれいな街
平塚市立浜岳中学校 長谷川 春奈

優秀賞
僕達の街がきれいになる方法
平塚市立浜岳中学校 吉田 響

努力賞
地震や津波に強い街
平塚市立浜岳中学校 竹下 実穂
「自治体」にしかできないこと
平塚市立浜岳中学校 能條 桃子

編集後記 ~~~~~
今号には「「地域経営」関連文献」を掲載しました。「まちづくり」に関する最新の文献リストです。ご活用下さい。(H) ~~~~~